

巻頭言

地域を支える救急医療のこれから

救急医学教室 教授

大阪医科薬科大学病院 救命救急センター・救急診療科 科長

山川 一馬



2026(令和8)年4月1日付で、大阪医科薬科大学 医学部生体管理再建医学講座 救急医学教室 教授ならびに大阪医科薬科大学病院 救命救急センター・救急診療科 科長を拝命いたしました山川一馬です。前任の高須朗先生をはじめ諸先輩方が築いてこられた教室の歩みを受け継ぎ、地域の救急医療にさらに貢献する責任の重さを日々感じております。この機会をお借りして、救命救急センターの現状とこれからの取り組みについてご紹介いたします。

本学救急医学教室は2001(平成13)年の開設以来、「救急医療は医の原点」を信念に、三島医療圏の急性期医療を支えてまいりました。2022(令和4)年7月には新本館A棟に救命救急センターを開設し、重症初療室2室と救命救急ICU20床を備え、初療から集中治療まで切れ目なく提供できる体制を整えました。救急診療科はその中核として、一次から三次までの救急患者を受け入れ、専門診療科単独では対応が難しい心肺停止、重症外傷、敗血症、急性中毒、広範囲熱傷、重症呼吸循環不全などの病態にも横断的に対応しています。2025(令和7)年の救急外来受診数は9,734件、救急車受け入れ件数は5,994件、三次救急患者数は1,043名でした。これらの数字は、地域から寄せられる期待の大きさを示すと同時に、私たちが果たすべき役割の広がりをお話しています。この体制をさらに磨くことが、地域の安心と安全を守る大学病院の責務であると考えています。

現在の救急医療は、高齢者救急の増加、救急搬送需要の逼迫、医師の働き方改革への対応、災害や新興・再興感染症への備えなど、多様で複雑な課題に直面しています。こうした課題に対しては、病院内だけで完結する対応では十分ではありません。救急隊とのメディカルコントロール体制、特別救急隊(ドクターカー)事業、院内CPRコールや救急教育、地域の医療機関との連携を一層強め、プレホスピタルから初期診療、集中治療、専門治療への橋渡しまでを一つの流れとして整えていく必要があります。

われわれは、「断らない救急」を基本姿勢としつつ、限られた医療資源を適切に活用するため、データに基づく診療の質改善と運用の最適化を進めてまいります。また、外傷外科、集中治療、IVR、脳神経外科、麻酔科、災害医療など多彩なサブスペシャリティーを持つ救急科専門医が力を合わせ、いかなる重篤症例にも迅速に対応できるチームを育ててまいります。大学病院としての使命は診療にとどまらず、次世代の救急医を育成し、臨床から生まれる疑問を研究へ繋げ、その成果を再び地域医療に還元することにあります。

救急医療は、一つの施設だけで成り立つものではなく、会員の先生方、救急隊、行政、院内外が多職種の皆さまとの信頼関係の上に支えられています。ご紹介やご相談の際に「まず大阪医科薬科大学病院救命救急センターへ」と思っただけの存在であり続けられるよう、教室員一同、誠実に努力してまいります。大阪医科薬科大学医師会の益々のご発展と会員先生方のご健勝を祈念し、巻頭言といたします。